



2009年(平成21年)
2月号(No. 765)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

URL ● <http://www.jac.or.jp>

e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目次

公益法人制度改革法施行と、日本山岳会の取り組み	1
大日岳巨大雪庇の研究	4
子どもたちの森林体験の大切さ	6
冬山天気予報配信が成功裏に終了	8
東西南北	9
三浦半島の台湾リス／ウェストンの著書に載るオベリスクの写真	
活動報告	10
山研運営委員会／指導委員会／山の自然学研究会	
支部だより	12
秋田支部／関西支部	
図書紹介	14
会務報告	16
新入会員	16
ルーム日誌	17
会員異動	17
図書受入報告	17
INFORMATION	18
山の博物館訪問	19
松本市山と自然博物館	

▶ 日本山岳会事務局(含図書室)取扱時間
月・火・木 10～20時
水・金 13～20時
第2、第4土曜日 閉室
第1、第3、第5土曜日 10～18時

公益法人制度改革法施行と 日本山岳会の取り組み

公益法人化プロジェクトチーム委員長 竹内哲夫

昨年末、施行された公益法人制度改革法は、山岳会に「公益法人」か「一般法人」かの選択を迫っている。これまで「公益法人」化が主流であったが、逆に選択しないほうがよいとの意見もある。現状を竹内哲夫氏に報告してもらった。

平成20年12月から、公益法人制度改革法が施行された。この法律は、平成18年6月に公布され、深く関わることになる日本山岳会においても、すでに平成19年秋以来、理事会承認のうえ「公益法人化プロジェクトチーム」を発足させ、対応を検討することとなり、私が委員長に指名された。

平成20年3月にはプロジェクト

チームの佐野忠則委員に、会報『山』3月(754)号で、公益法人制度改革とは何か、日本山岳会としてどんな取り組みが必要か、今後のスケジュールはどのように展開することになるかなど、会員のご理解を得るべく発表していた。

この記事は、難解な公益法人改革の解説と啓蒙を兼ね、どんなと

ころに日本山岳会への影響が及ぶことになるのか、それに対して日本山岳会がどんな対応を迫られることになるのかなどを概観した内容であり、むしろ問題提起と捉えていただいてよいものであったと思う。

当然のことながら、会員からはいろいろな意見が寄せられた。その一部を紹介しよう。

(1) 社団法人は、今後「公益社団法人」と「一般社団法人」に分類されるが、きわめてハードルの高い、また国の厳格な監督、指導を受ける「公益社団法人」を目指す理由は一体何なのか。寄付金が免税扱いとなり、税制上の優遇措置を受けることを求めるのか、社会的評価が低下

するのではないかと怖れるかなのか。日本山岳会の本質はそんなところにあるのではあるまい。

(2) 「公益」すなわち不特定多数者に対するサービスは日本山岳会の会員にとつては第二義的なものであり、会費収入をもつて運営している日本山岳会は、基本的には山を愛する会員相互の親睦と研鑽の場であり、そこから山岳の啓蒙、自然保護活動などがスタートしており、「公益」をベースに「公益」を展開しているの、「公益」を第一義とすることは、日本山岳会としてどう考えたらよいのか。なぜなら「公益」を主とする社団法人は、「公益社団法人」とは認定されないからである。

(3)「公益社団法人」に対しては、国の指導、規制が強く、とくに収支に関しては公益目的支出が支出の50%以上あることと規定されており、毎年度計画及び決算で国のチェックを受けることとなる。そのためには支部助成金の使途の明確化が求められることとなり、最終的には日本山岳会全体の収支を把握するため、本部と各支部の連結収支が必要となり、その経理処理が果たして現体制で可能かどうか。

(4)「一般社団法人」を指向する場合においても、認可届出の際に「公益目的支出計画」を作成し、保持している「公益目的財産残余額」を公益目的のために支出する年度ごとの支出予定計画(数十年間でもよいといわれる)を提出しなければならぬ。

前回の佐野氏執筆の中間報告のなかで、宮下会長が、一般社団法人になると、四番町ルームや備品、図書、上高地山研など、現有財産の保持が困難となり、会員一人ひとりの会費収入と資産蓄積の努力によって築

かれてきた山岳会の存立(資産を含む財務基盤)が危うくなると心配しているとあるが、今回の法律以前の税金分まで払えとは無謀であり、納得できないと断固抗議せよ。

右のような意見、疑問を踏まえて、今後の対応を検討するのは当然である。

そもそも公益法人制度改革は、「民による公益の推進」を大義名分に、民間非営利部門による活動の健全な発展を促進し、現行公益法人制度の問題点を見直すべくスタートしたものであり、登記のみで認可を必要とせず設立を可能とするなど設立を容易にしている。しかし、現実新たに制定された公益法人制度改革関連法をみると、現に存在している公益法人に対しては現行よりはるかに厳しい規制が課せられているようにも思える。

既存の公益法人は、「公益社団法人」「公益財団法人」を目指す場合はもちろん、「一般」に移行する場合においても、名称を変更すれば済むのでなく、「一般社団法人」として届出、認可を受ける際に、前記(4)で述べたように、移行後の日



20年度、高尾の森で行なわれた植樹祭。一般も参加して公共性が高い

本山岳会が、その時点での正味財産額をベースに算定した「公益目的財産額」に相当する金額を「公益目的のために支出することによりゼロとする」ための計画、すなわち「公益目的支出計画」を作成、提出しなければならぬ。しかも支出計画の実施状況を毎年、行政庁(内閣総理大臣)あてに報告義務がある。

移行時における日本山岳会の公益目的財産額を確定した、毎年度の支出計画を作成するのは、これまた財務会計上大変な作業になる。その際、正味財産額が一定額(内閣府令で定めることとされている)に達しない場合は、公益目

的支出計画作成は必要なしとされており、今後これを見据えながら、場合によっては、日本山岳会の正味財産額の確定作業も必要となる。

公益法人化プロジェクトチームの発足に当たっては、その名称のとおりに公益社団法人を当然目指すものと考えられていたと思う。と言っても、平成25年11月末までの猶予期間が置かれており、日本山岳会のみならず、ほかの多くの社団法人がその対応に苦慮しつつある状況からみても、今後、日本山岳会のあるべき方向、税制など未確定要素の具体化などを勘案しつつ、望ましい結論を得るべく慎重、冷静に対処してゆかねばなるまい。

本年1月23日、公益法人化プロジェクトチームと定款検討委員会との第1回合同会議が行なわれた。定款検討委員会は、公益法人制度改革のなかで事業目的、組織、役員、財務など、法令に従い改定を必要とする定款部分をどのように取り扱うかを審議する委員会である。しかし、この会議のなかでは、「公益法人化プロジェクトチーム」発足当時とは、会の空気がかなり



指導委員会主催の公益性の高い雪上技術講習会

変化しつつあるとの印象を受けた。「公益社団法人」としての認可を求めるためには、日本山岳会として毎年の公益目的事業が総支出の50%以上でなければならぬ。これは毎年2000万円から3000万円規模の公益目的事業を企画、実施することになるが、現実には極めて困難ではないか。公益目的の事業とは、「不特定かつ多数の者の利益の増進に寄与する」事業である。寄付金や補助金ではなく収入の基本を会費収入により運営している当会の事業費の50%以上を公益目的に支出することが可能であるか、また会員がこれをもつてよしと認めてくれるであろうか。

また日本山岳会の現状は、全国の各支部が、支部長を中心に、柔軟かつ活発な活動を行なっている。「公益社団法人」においては、権限と責任の明確化の観点から、会の統一運営が求められ、代表者としての会長にすべてが集中する結果、従前のような支部の活動が制約され、加えて、連結決算による会計上の制約からも支部運営に支障を招くおそれがありはしないか。

支部との連結決算を行なうためには、会計事務処理は膨大となり、事務局体制の大幅な強化が必要となり、会の財政基盤に影響する。

以上のような意見が現在のところ大勢となりつつある。「公益社団法人」になることは、税制上、寄付金控除等のメリットはあるものの、会として失うものの大きさも考慮しなければならないことは事実である。

また「一般社団法人」を指向するに当たっても、「公益目的支出計画」の作成、純資産額の算定に当たつての秩父宮記念山岳賞基金や海外登山基金などの取り扱いも検討を要することとなる。

いずれにしても「公益社団法人」

か「一般社団法人」のどちらかを選択し、平成25年11月までの間に申請、認可を受けなければならぬが、当初、一気呵成に公益社団法人化をと考えられていた状況が、現状では慎重論が強まっている。なお会員各位の意見や今後の国の施策の推移などを見ながら、支部体制を維持しつつ、今後の日本山岳会に最もふさわしい結論が得られるよう努力したいと考える。

定款改定委員会では、本年5月の通常総会に付議できるよう検討を進めているとのことであるが、とりあえず、公益法人改革についてご理解とご協力を得られるよう、当プロジェクトチームとしての現況をお知らせすることにした。

【参考】

昨年（平成20年）12月、新聞紙上で報道された記事によると、12月からスタートした新公益法人制度で、文部科学省が監督するスポーツ関連団体の70%が公益認定を旨とする意向であることが、同省の調査結果で判明した。また移行時期は、その約30%が2010年度中と答えたとのこと。日本山岳会もこの範疇に属しているといえる

が、いずれにしても各法人とも模索が続いていると思われる。

また公益法人税制については、平成19年末の政府税調において、新制度による一般社団法人・一般財団法人について一律の取り扱いをすることは適当ではなく、態様に応じた措置を講じるべきとしている。一般社団（財団）法人のうち、剰余金の分配の禁止、剰余財産の帰属の制限、非営利性が徹底され、公益的活動を目的とする等を定款で定めている場合は、税制上、若干の負担軽減を考慮するべきである、としている。

サイエンス

大日岳巨大雪庇の研究

横山宏太郎・飯田 肇・川田邦夫

はじめに

このたび「大日岳巨大雪庇の形成機構に関する研究」により、栄えある秩父宮記念山岳賞(第10回)をいただいた。喜びと同時に、その重さを感じているところである。推薦してくださった方々や関係の皆様方に、篤くお礼申し上げたい。またこれは現地調査や議論に参加された方々、支援してくださった方々のおかげであり、ともに受賞したとも思っている。

ここでは字数も限られるので、詳しい内容は『山岳』第百二年(2007年)や『北アルプス大日岳の事故と事件』(斎藤惇生編、ナカニシヤ出版、2007年)に発表した私たちの報告をご覧いただくことにして、研究の概要を簡単に紹介しよう。

きっかけと現地調査

北アルプスの大日岳(2501^{メートル})周辺は国内有数の多雪地であり、山頂付近には大きな雪庇が発

達するといわれていた。2000年3月、この雪庇が崩壊し、2人の尊い命が失われた。この事故の検討から、雪庇、特に大日岳のそのような巨大雪庇の場合、その規模や形成・崩壊・消滅の過程などはほとんどわかっていないことが明らかになった。「安全で楽しい登山」を実現するには、対象である山を、そこで起きる諸現象を含めてよく知ることが必要である。そのため巨大雪庇について、形状と構造を現地で調査し、その形成から消滅の過程を解明したいと考えた。

まず2005年4月17日から27日の間に、雪氷研究者、登山家、山岳ガイドら総勢51名が参加して現地調査を行なったが、悪天候の日もあり、調査活動は71人^{にんじふ}日であった。雪庇の形をレーザー距離計で測量するため、反射板を持った人には、万一に備えてロープで確保しながら、雪庇先端に2^{ふた}位まで近づいてもらった。雪庇の断面

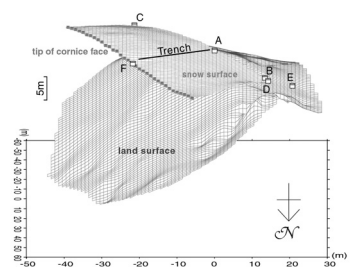


写真① 雪庇の断面を観察するため掘り進める作業

を見ようと、チェンソーやスノードンプで掘り進めたが、全体の断面を作るには相手が大きすぎて、幅2^{メートル}、深さ3^{メートル}位のトレンチになった(写真①)。長さは37^{メートル}もあった。いったん掘ったトレンチが雪で埋められ掘りなおしたこともあった。

さらに深いところを調べるため、トレンチの底に縦穴(ピット)を4カ所掘り、また2カ所では手回しドリルでピット底から2・8^{メートル}、9^{メートル}のコア(円筒形)試料を採取した。こうして、層構造や密度などを調査した。

物資約2^トのうち、大部分の調査機材、食料などはヘリコプターにより輸送した。おかげでおいしい食事で英気を養うこともできた。地表面の形状測量のため、10月に



図① 北側から見た雪庇の三次元形状
Fig.4 3-dimensional expression of topography and snow surface. D is triangulation point.

も現地調査を実施した。大勢の参加と各方面のご協力によりはじめて可能になった調査であった。

巨大雪庇の形状

現地調査の結果、これまで写真等での推測が主だった大日岳山頂付近の巨大雪庇の形状を正確に実測することができた。図①に雪庇の表面形状測量結果と地表面測定結果を重ね合わせて三次元で表現した。また、写真②に観測当時の雪庇断面を示す。

雪庇という言葉からは長くのびた庇を想像しやすいが、大日岳の雪庇はほとんど庇状を呈さずブロック状となっていて垂直に近い前面を持ち、山稜より風下側に発達した巨大な吹きだまりといっている。調査時には、尾根からの張り



写真② 大日岳山頂付近の巨大雪庇の前面

出しは約32メートル、先端の高さは9・2メートルもあった。雪面は、尾根から風下に向かって高まってゆき、最高点は尾根から約20メートルも谷側に寄った地点であった。

冬期は雪面の勾配はもつと急で、最高点はさらに谷側であったと推測される。融雪期に入ると、積雪の変形が進み、先端部全体が低下した結果として調査時の形状になっているものである。雪面の最高点は無雪期の尾根からずっと谷側にある点に注意が必要である。

先端部より2・3メートル山側にクラックが見られ、そこから先端まで雪庇表面はさらに傾斜を増して下降している。このクラックが広がると、やがて先端部の雪庇ブロックが崩壊する危険がある。

積雪地形

欧米の研究者たちは、風下側が急斜面で、その上に鋭く突き出した庇を持つものを「典型的な雪庇」と考えてきたようである。文献の図では、庇部分が1メートル程度と、それほど大きくない。風下側の傾斜が緩くなると、庇の張り出しは短くなり、しだいに吹きだまり状となる。大日岳の雪庇は、さきに述べたように、緩傾斜面の雪庇が豊富な降雪量のもとで大きく発達したものの、言いかえれば巨大化した吹きだまりと見ることができる。

山地では、地形と風の影響により、雪が一様に積もることは少ない。また、いったん積雪が形成されると、その表面が地形と同じような働きをして、またさまざまな形の積雪を作っていく。これらを広く含む言葉として、地表面上に積雪が形成されたときの表面形状、またその積雪部分の形状を「積雪地形」と称し、「雪庇」「吹きだまり」などはその特殊なものと位置づけることにした。

巨大雪庇の形成・崩壊・消滅過程

雪庇の成長や消滅については、以下のように考えている(図②)。

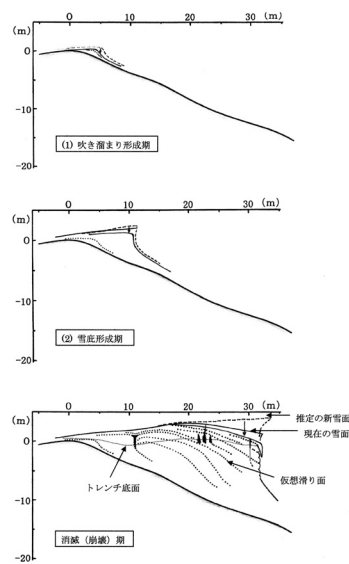
まず山稜の風下側では風が弱まるため、そこで吹きだまりができてはじめる。柔らかい雪は変形して表面が下がり、そこに雪が溜まり、次々と堆積が進んで、風下側へ吹きだまりが成長していく。前面の傾斜は次第に急になり、やがてスムーズだった斜面に段差が生じる。するとそこに雪の庇が形成されるが、自重で垂れ下がり、そこを埋めるようにさらに堆積が進むので、垂れ下がりには重みに耐えきれずに部分的に落下し、断面を垂直に近い断崖にする。さらに表面低下した後、激しい吹雪などでこの断崖もすっかり埋められ、再び吹きだまりが前進することもある。

雪庇の先端部はその厚みも大きくなり、内部には大きな力が働いて滑りや変形を起こすと考えられてお祈り申し上げます。

雪庇の先端部はその厚みも大きくなり、内部には大きな力が働いて滑りや変形を起こすと考えられてお祈り申し上げます。

おわりに

このたびの受賞は、私たちの研究が「積雪地形」という概念を示したことで、巨大雪庇の解明に前進したこと、また登山家、山岳ガイドと雪氷研究者の協同作業であったこと、さらには市販図書や『山岳』で、成果を広く示したことを評価していただいたのではないかと考えている。受賞を励みに、さらに研究を進めていきたいと思う。最後になったが、2000年の事故で亡くなられた内藤三恭司さんと溝上国秀さんのご冥福を謹んでお祈り申し上げます。



図② 巨大雪庇の形成・消滅の過程

る。その結果、表面には現れない内部クラックが発生していることがあるので注意を要する。融雪期になると、融雪水が入り込んで積雪全体にさらめ化が進んでいく。

トピックス

子どもたちの森林体験の大切さ

橋村一豊

私たちは、森づくりを進める上で森林施業と並ぶ主要テーマとして、森や山地の自然を利用して森の公益性、生態系の仕組み、生物多様性を学ぶ教育を行いたいと思っている。できるだけ多くの子どもたちに森のありがたさをわかつてもらいたい。アルセーニエフの名作『デルスー・ウザーラ』の世界にふれてもらいたい。

これまで、猿投の森に止まらず、伊勢神宮の宮域林、白山千振尾根や三ノ峰、芦生の森、西表島や屋久島、白神山地、ボルネオ島ランビルヒルズの森（マレーシアの熱帯雨林）など、広く各地の代表的森林を活動領域としてきた。

日本人口の80^{パーセント}は都市生活をしているが、コンクリート構造やインフラ整備によって森から隔てられている。自然にふれる機会が乏しいままに成人し、偏った、あるいは貧しい自然観を形成する人が多い。このような状況は環境立国をめざす日本にとってよくない。

少しでもその改善に役立ちたいというのが私たちの願いである。

幼少期に本物の自然にたくさん触れ、五感を通して森を知った人は成人期になるころその記憶に裏打ちされた、豊かで調和のとれた自然観を持つようになる。それは文明観や世界観を形成する基礎となる。人は自然界に身を置くことにより、自然にどう接したらよいか、サステイナビリティ（持続可能性）とは何かを知る。自分の登山人生を振り返ってみる時、少年期に山の自然から受けた恩恵と感動の大きさに思い至るのである。これが「幼少期森林体験イニシアチブ」の考え方で、私たちの森林活動のバックボーンである。

昨年（08年）、猿投の森では7回の学習会を行なったが、そのなかから子ども向けの催しを3つ紹介しよう。

森の探検隊

アクティビシニアネットセと



ザイルを使ったターザンごっこで遊ぶ子どもたち

（瀬戸市の中高年を中心とするNPO）と猿投の森づくりの会（以下猿森会と短縮する）の共催事業で4月、5月、6月と三次にわたって来森した。彼らは森の下見をしてプログラムを作るなど用意周到で、進行は彼らに任せ、私たちは要所を支えた。ボーイスカウトとガールスカウトが特に元気が良かった。

通期の参加者数は子ども29人、保護者20人、NPOが21人、猿森会が30人だった。

ネイチャーゲーム、木登り、ザイルを使ったブランコやターザンごっこ、木工、森歩き、伐採など盛り込みすぎのプログラムに思え

たが、NPOの人たちの張り切りようは大変なもので、すべてをやりました。

トトロの森の探検隊

猿森会の顧問をお願いしている神戸^{かんべ}洋美^{ひろみ}さんは県会議員と教育者（ひなご幼稚園長・春日井市）という二足の草鞋を軽々とはき分ける活力に満ちた女性である。環境問題を主政策としておられる。

この幼稚園の年長組とその兄弟姉妹の小学生が、11月15日、森へやってきた。子ども48名、保護者や教諭ら46名、合計94名の大集団



森歩きをスタートする前に記念撮影

である。一昨年も100名超で来森し、今回は2回目である。

神戸さんの指導が行きわたって、子どもの森林体験の大切さが親たちに浸透しているせいか、募集締切後にキャンセル待ちの長いウエイティングの列ができたという。今回は幼稚園と猿森会に加えて、日本山岳会東海支部のボランティア委員会(委員長・夏目正憲)が加わり、三者共催となった。11月に催行する理由は二つ、蜂害を避けるためと、猿投の森の紅葉の最盛期に当たるからである。

子どもたちは色の異なる紅葉によって森にはたくさんの樹種が共存(170種の木本がある)

し、あるいは競合もしつつ生きていく生物多様性を目のあたりにするだろう。登山道ではない落葉のフカフカする林地が水源かんよの腐葉土を生み、木の肥やしにもなることを足の裏で体感したのである。イノシシの足跡に驚き、サワガニを夢中で追い、エビフライ(尾張弁でエビフライのこと、リスの松ボックリの食痕を指す)をみつめて大喜びした。

日本山岳会からは20名の森人が出て大切に应对した。親と子の感想文30通を見たが「おじさんの説明はおもしろかったが、列の後方では聞こえなかった」というクレームが7件あった。これは野外学習での重大なミスで、次回は改善の要がある。大半の親たちが「また来たい」と、この催しを嘉納している。

陶原とうげん小学校の学校林

愛知県と瀬戸市が共催する「元気! 森もり祭り」の森林体験会が瀬戸市の陶原小学校の学校林で11月29日に行なわれた。

校有林を持つような恵まれた環境の学校が、日本にはまだ相当数ある。(社)国土緑化推進機構による



伐倒した木を解体する母と子どもたち

と、06年時点の調査で、全国の小中高校の7・8割、3057校が校有林を保有している。

開会のあいさつは増岡錦也瀬戸市長を皮切りに愛知県幹部や校長先生が続いた。皆どれも簡潔で、森への思いがこもるよいスピーチだった。質素だが、よく考え抜かれたプログラムは、この催事を切り回した尾張農林水産事務所の鈴木金幸さんら県職員フォレストーたちに負うところが大きい。その鈴木さんは前任の県有林事務所時代に、猿投の森づくりの立ち上げでは大変お世話になり、増岡市長も2度にわたり私たちを元気づけに猿投の森へおいでいただいた。

そのゆかりで私たち4名がこのフェスティバルに列席したのである。やることは陶原小の親子に雑木林の伐採の手引きをすることで、私たち以外にも他のNPOの人が数名参加していた。

このプログラムのなかで特に私が注目したのは、栽培農家から入手したコナラのホダ木にシイタケが密生したものを並べ、子どもたちに一人8つだとかいつて収穫させる遊びである。子どもたちは家へシイタケをおみやげにし、家族とともに賞味し、森の恵みを生涯忘れ難く記憶するだろう。

トピックス

冬山天氣予報配信が成功裏に終了

高校では、地上天気図をインターハイ対策で練習した。天気図のときには自信があったが、予報は難しかった。審査教員でさえ正確に予報できていたのか疑わしい。

大学の冬山山行で、天気図作成は重要だった。気象通報は1日3回。行動中の9時10分は無理。16時にテント内で、22時は緊迫したときのみ付けた。1日1回の天気図のみで得られる情報は限られていた。

觀天望氣、西高東低、疑似晴天、移動性高氣圧、日本海低氣圧、太平洋沿岸低氣圧、二ツ玉低氣圧、石狩灣小低氣圧——。この程度の知識しかなかった私は、昭和55年末から56年にかけて豪雪の白山に閉じこめられた。毎日、天気図とにらめっこだった。予備食も残り少なくなつて食ひ延ばしが始まつたが、疑似晴天を利用して脱出した。大学山岳部では悪天時に行動することはめつたにない。それでもこの年の豪雪では判断を迫られた。社会人になつて、限られた日

数で北アルプスや日本海側の冬山に入るのには慎重だった。精度の高い冬山天気予報を山中で知ることは夢の話であつた。

それを可能にしたのは、豊富な
冬山経験とヒマラヤ経験を積んだ
気象予報士の猪熊隆之氏とモバイ
ル通信の技術革新に他ならない。
北アルプスの夏山天気予報は、槍
ヶ岳HPですでに猪熊氏が配信し
ていた。しかし、携帯で情報をと
ることはできなかった。

上高地にある携帯電話の基地局は通年で稼働しているので、冬の槍・穂高稜線でも携帯が利用できることがわかった。猪熊氏に相談したところ、とりあえず試験的に12月21日から1カ月間やってみようということになり、費用は試験期間として格安料金で受けてくれることになった。

PC用HP作成はすぐにできたが、携帯用は簡易的なものしか作れなかった。メール配信方法については青年部委員長の故・森啓氏

北アルプス北部の明日の天気

予報提供:株式会社メデオテック・ラボ
2009年1月18日15時発表
場所:北アルプス北部山頂(標高2,990)

[illegible]

冬山天氣予報

がアドバイスしてくれた。低温でバッテリーの消耗が気にかかる。必要な山域だけのメール配信が希望だが、技術的に解決しなかった。ので今後の課題となった。

稜線上に冬期も稼働している氣象観測機器があれば精度が高まるのだが、なかなかそうもいかない。猪熊氏の経験則に頼る部分が大きかった。

終了後、猪熊氏からは「衛星画像、山行報告、レーダー、ライブカメラなどを駆使してほぼ掌握しました。3、4日ほど数時間予報と実際の天候がずれてしまいました（12月28日に朝から崩れてしまった）が、かなり精度の高い予報を出せたと思っています」との

コメントがあった。
メールアドレスの登録は110
0件。内訳は、PC11793、携
帯1307（ドコモ1162、a

終了後のアンケートには193通の回答があった。アンケートはP Cのみ対応なので、24^{パーセント}の回答率である。外れてしまった予報についても詳細な情報をいただいたので、今後の予報精度向上に役立てたい。

「満足されましたか」という問いには、非常に満足Ⅱ80、満足Ⅱ101、やや満足Ⅱ6、普通Ⅱ3、不満Ⅱ0、未回答Ⅱ3。ほとんどの方が満足されていることがわかるが、今後の改良や精度の向上に期待することも読み取れる。「天気が必要か」という問いには、ほとんどが「必要」と答えているが37人が「不要」と答えている。シンプルでやさしい予報のみを希望している方もいることがわかる。

「正確な年末年始山岳気象情報配信のおかげで、槍ヶ岳登頂に成功しました」という感謝のメールもいただいた。来シーズンもバージョンアップして、この企画を実現したいと考えている。(古野淳)

東西南北

N

S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします)

三浦半島のタイワンリス

祖父川精治

三浦半島や鎌倉周辺で山歩きを楽しんでいる際、微かな物音がすることがある。確かめると、そこに可愛らしいタイワンリスを見ることがある。この地域で初めて野生化したタイワンリスが確認されたのは、昭和25(1950)年ごろといわれる。仕草が愛らしく珍しいので餌付けされたようである。

タイワンリスは「クリハラリス」というのが正しい和名で、腹部が「ニホンリス」の白色に対して、赤茶(クリ)色をしている。北米産のアライグマと異なり、寒さに弱く、平均寿命1・5年、最長4年。出産は年1、2回で1匹か2匹の仔を産む。主にスダジイなど常緑樹の枝や幹間に、枝で丸く組み合わせた落ち葉などを敷いて仮

眠、またそこで産み育てるという。

本来の生息地は、中国南部、台湾、インドシナ・マレー半島の亜熱帯地方で、種子果実が主食である。現在、東京、神奈川周辺から九州まで広く定着しているものと考えられる。

鎌倉市では市民に対し、チラシや掲示板へのポスター等で「餌付けはやめましょう」と注意を促している。葉山町や横須賀市の農家では野菜類の農作物やシイタケ、ミカンのほかに庭木などが食い荒らされ、また家の戸袋や電線を齧られるなど、迷惑している人がいるからだ。

また、駆除するため捕獲に協力する市民を募っている。ある有名寺院周辺の家では、1日で3匹も捕獲したという記録がある。半島先端の三浦市でも2001年に生息が確認されている。横浜市内の公園では「ガツガツ」といった威

嚇警戒の音声を聞いたこともある。最近「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」略して「外来生物法」が制定された。被害予防三原則として、

1・悪影響を及ぼすかもしれない外来生物をむやみに日本に入れない。2・飼っている外来生物を野外へ捨てない。3・野外にすでにいる外来生物は他地域に広げない、を徹底することにした。

タイワンリスはこの特定外来種に指定されたため、今後、輸入、飼育は許可されないことになった。

ウェストンの著書に載るオベリスクの写真

田畑真一

1918(大正7)年、ウェストンは英国で『極東の遊歩場』(『日本アルプス再訪』)を刊行した。この本には、地蔵岳にあるオベリスク状巨岩の写真が載っている。しかし、撮影者名は書かれてなく、不明になっていた。

大正15年7月、田島勝太郎は、『山行記』を著わし、そのなかにウェストンが掲載したものと同じ

写真を載せた。田島は「辻本博士撮影」との説明をつけた。

この辻本博士とは、だれか。

田島の本に凡例のページがあり、「写真に就いては工学博士辻本満丸君」とある。これにより、辻本博士とは、辻本満丸だったことがわかる。

木暮理太郎は、辻本満丸への追悼記「辻本満丸君逝く」(『山岳』第三十五年第二号)を書き、「君の登山熱は山岳会に入会されると共に急に高まり、明治三十九年の鳳凰山を手始めに、大正元年頃迄は主に南北アルプスの諸峰を活躍の舞台として」と紹介した。辻本には関係の紀行文「甲州鳳凰山と地蔵岳」(『山岳』第一年第三号)があり、「近年外人中には好んで之(筆者注・オベリスク状巨岩)に登山する人あり、小島氏(筆者注・小島鳥水)に依ればウェストン氏も之を窮めたるものの如く」と紹介している。

これにより、辻本はウェストンを知っていたことがわかり、その後、なんらかの経緯で、例の写真が辻本からウェストンに渡ったと考えることができる。

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です

山研運営委員会

お正月は山研で

大晦日の朝。岐阜を出発し平湯でタクシーに乗り換え、釜トンネルで下車。11度の勾配に汗をかきながらトンネルを抜けると白銀の世界だった。

ときどき、青空ののぞく天気。大正池ホテル横から梓川に出ると、焼岳が大きく見える。樹皮を剥いで空腹をしのぐ猿の群れもいるようで、その跡が残っていた。

3時間後、山研に到着。薪ストーブの火が暖かく燃え、テラスに面した窓の外には雪を被った木々がひっそりと佇む。この時期に上高地で宿泊できる贅沢を味わいながら寛ぐうちに、ほかの宿泊者の方も到着し、総勢18名となった。

日暮れとともに豚しゃぶのヘルシー鍋で懇親会が始まる。鍋が終ると、次にチラシ寿司の夕食。

食後の片づけをして、しばし休息。続いて年越しパーティが始まる。

カナッペにワイン、最後に年越しそばと、立ち入り禁止の厨房から魔法のように次々と料理が出てくる。最後は、景品が盛りたくさんのビンゴゲームで締めくくり。花のカレンダーも全員がいただけた。

元旦は穏やかな半曇り。朝食は塗りの皿に8種類のおせち料理が並ぶ。ブリの雑煮に、大吟醸八海山で新年を祝う。お弁当にいなり寿司をいただき、明神、徳沢、徳本峠と、それぞれの目的地へと出かけていった。

焼岳が朝日に陰影をまとうて美しく、木道に積もった雪や凍りついた滝もおもしろい被写体となる。明神の穂高神社奥宮に初詣をし明神池へ寄ると、湖面に点在する小さな島々がそれぞれに雪を載せて可愛らしい風情を見せる。午後、風が出て雪も降ってきたため、14



お正月は山研で、また会いましょう

事前に山研に戻る。途中の沢で、炊事と飲料に使う水をポリタンクで運ぶ手伝いをした。

トイレは建物の外のレンタルトイレで、お風呂はない。

山研2日目の夕食はエゾシカの焼肉、豚肉を包んだジャガイモのダンゴのスープなどが並び、昨夜に続き幸せな時を過ごす。

2日の朝は少し吹雪模様。雑煮とおせち、お屠蘇をいただき、宿泊者全員で記念撮影と寄せ書きをする。

河童橋まで送って下さった坂本委員とお別れし、心温まる素晴らしい3日間は終わった。

(久野菊子)

指導委員会

講演会「雪山救助現場の実際」

同じ内容のセミナーを一昨年に、一般山岳愛好家向けに開催したところ1000人を超す来場者があった。本会幹部からは「こういうものは、会員向けにもどんどんやってほしい」との励ましを受け、2年連続で、長野県警山岳遭難救助隊に講師派遣をお願いした。平出剛隊長自ら講演していただくことになり、昨年12月10日午後7時から2時間にわたり、本会104号室で満席の約50人を前に講演会が開催された。

講演内容は、ヘリが山肌を縫いながら要救助者を搜索する迫力ある動画や、雪崩や転滑落などの遭難現場の衝撃を伝える生々しい写真を写し出しながら、遭難原因の解説や救助隊員の活動が語られた。しかし、平出隊長からは隊員の苦勞ぶりや愚痴などは一切語られず、公務に邁進する姿に感銘を受けた。

ある県知事が県警ヘリ有料化を言い出したときに、その県警幹部が「うちはそんなこと考えたこ

ともない。要救助者がいれば出る」と言っていたことを思い出した。

航空隊ヘリコプターの出動や長野県警が考案したレスキューシートの有効性も、結局は厳しい訓練のなかで最新の救助技術を身につけた隊員がいるからこそ活用できることを、この講演会であらためて知らされたわけである。

職務とはいえ、厳冬の山中に降り立ち要救助者を救い出す隊員たちは、遭難者にとつてまさに救いの神ではあるが、救助隊が暇をもてあますような状況こそが当たり前前の登山界でなくてはならないと痛感した次第でもある。

(黒川 恵)

山の自然学研究会

上高地とエコツーリズム

地球の環境問題を話し合った「地球サミット」から10年たった2002年は国連が定めた国際山岳年、「我ら皆、山の民」の標語を掲げた国際エコツーリズムの年でありました。日本も一昨年6月にエコツーリズム推進法が成立し、昨年4月1日施行となりました。

エコツーリズムとは「観光旅行

者が、自然観光資源について知識を有する者から案内または助言を受け、当該自然観光資源の保護に配慮しつつ当該自然観光資源と触れ合い、これに関する知識及び理解を深めるための活動」です。

これは「山の自然学研究会」が15年前から上高地において進めてきた活動です。その内容として、毎年夏季に連続2週間、ビジターセンターを本拠にして昼は大正池から明神池・徳沢方面へガイドウォーク、夜はホテルのロビー等を借りて「ミニトーク」や、「子どもスケッチ会」(スケッチを通じて自然理解の感性が育成できる)など、一般の方を対象に自然解説と自然



パークボランティアによるガイドウォーク

保護啓蒙活動を行なってきました。

これらの活動を「インタープリテーション」と称しますが、ガイドウォークは「松本市」周辺地域にお住まいの地元有志が属している「上高地パークボランティアの会」と連携して、10年前から一緒に行なっているものです。パークボランティア(以下PVと略す)

制度は環境省が作ったもので、山の自然学研究会では14名が上高地PVとして活動しています。私たちのインタープリテーションを受けた人は毎年約500名を超えており、非常に価値のあるボランティア活動だと自負しています。

私たちは上高地の自然に関する知識の習得とレベルアップを図るため、2003年に及ぶガイドウォークマニュアル(A5判)とマニュアルの説明ポイント図(GPS使用)を作っています。このようなマニュアルは日本のほかの国立公園にはいまだありません(自然公園財団調べ)。また、新緑や紅葉のシーズンにも、適時、PV活動を行なっています。

日本山岳会では、現在、法人制度改革が論議されていますが、それを先取りした形で私たちは15年

前から「公益目的事業」を行なってきたと言えます。

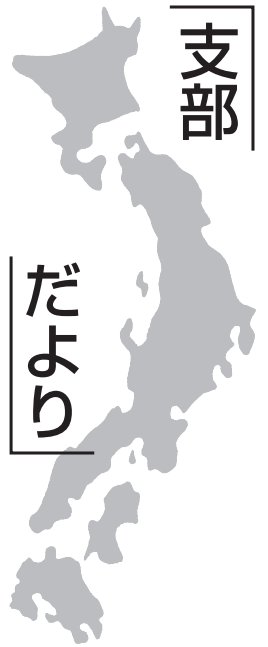
上高地は日本屈指の観光地であり、その景観の素晴らしさと自然環境の多様性は世界にも類例のない貴重なものです。年に150万もの人が訪れています。その大部分は上高地の自然観光資源に関する知識と理解を深めないままに帰ってしまっています。上高地ではPVは現在70名弱、このほかに現地ホテルや旅行業者が斡旋する有償のガイド等が若干名いますが、お互いに連絡もなく、ばらばらに活動しています。したがって観光客に対しては量的にも質的にも充分な対応がなされていないのが現状です。

昨年、エコツーリズム推進法がやつと施行されることになり、市町村が事業者、NPO、専門家、土地所有者、関係行政機関等による協議会を組織し、エコツーリズム推進全体構想を作成、推進することになります。「山の自然学研究会」では上高地インタープリテーション15年の体験と研鑽を生かして、これからさらに有効な活動をしていきたいと考えております。

(関 清)

支部

だより



全国各地の支部から、
それぞれの活動状況を、
北から南へとレポート
します。

秋田支部

支部山行——里山めぐり
七高山と太平山

「やあエごと、エごと、きれいだごと」と歓声が上がる。七高山登り口、牧場地廃家跡地に車を止め、歩き始めてまもなく「羽後町指定史跡七高山奥院」の立派な標識柱、案内板、小さな祠、磨崖仏などがあるところに出た。大きな岩盤に刻まれた文字は「梵行者大菩薩」と読め、その字の大きさは県内では珍しいとの一行のなかの識者の声。中世以降の山岳修験の道場であったこと、江戸時代の経世学者佐藤信淵の勉学の間であったこと等が表わされていた。

冬への歩みを止めたかのように穏やかな陽の差すなか、見事な紅葉である。祠の後ろの急斜面から登行を再開した。

この日、08年11月15日、雨が予

想される日曜日から前倒しし、「支部山行は雨」のジンクスを返上した。

秋田中央インター7時、参加者11名は3台の車に分乗して出発、東由利道の駅と経由し、羽後町払戸集落に着き、登り口を確認する。牧場の中を走る舗装道路の両脇には、柿の実が枝もたわわにぶら下がっている。あとで、あとで、と



七高神社のある七高山頂上で

牽制して登山口に向かう。

登り始めの急傾斜を除けば、比較的なだらかな落ち葉のじゅうたんの山道。はらはらと頭上に落ち葉が降り注ぐ場面もあり、快適である。右は雑木、左は杉の林の歩道をゆつくり歩き始めてから40分、10時に立派な彫り物が目立つ七高神社のある山頂に到着した。境内には七高山と刻まれた石碑と、当国三十三行塔、文化三年と刻まれた石柱があり、そのそばにかなり浸食が進んだ観音様かと思われる石仏が並んでいた。

全員での記念写真後、稲倉魂大神が祀られている神社の冬囲いの隙間をかいくぐって暗い中に入り、拝ませてもらった。

「ところで三角点は」の声で、神社裏手の藪地など、境内を全員で地図と照合しながら探し、神社の正面右手草地に三等三角点を見つけた。

10時20分、下山開始、30分ほどで駐車地点着。戻るや否や、来る途中のお目当ての柿の木にそれぞれ向かう。次の行動もあり短時間ながらそれなりの収穫となった。

今年は豊作なのだろうか、見向きもされていない柿の木がやたら目

につく。この辺りは昔、住居があり、集落があったと思われる。

次の山は西馬音内太平山。西馬音内盆踊りで有名な街中を進み、旧道を回り田代方向へ。七曲峠を上り切った辺りから右方向林道に入り、ほとんど山頂といったところまで車が入る。歩いて数分の所に三角点、その先50メートルほどの所に太平山を祀っている神社があった。この一帯は「太平山いこいの森」として整備されていたのだが、今は道路も大分崩れ始めていた。

車で少し戻り、古代に秋田城——雄勝城——多賀城間の火急連絡の燭台があったといわれる煙岡神社に参拝。ここからの東側の眺望がすこぶる良い。奥羽山脈の各山々を皆で言い当てる。柔らかな陽ざしを浴びながら全員車座で昼食をとり、山談義に花が咲いた。

この後、「長谷山の三階建」と言われて地域のシンボルになっている、旧田代村の地主屋敷を整備した「羽後町総合交流促進施設旧長谷山邸」を見学後、朝来たルートを帰り、16時30分、秋田中央インターにて解散となった。

(柴田 勲)

関西支部

四国分水嶺踏査の終了報告会

関西支部が2006(平成18)年5月27日から開始した「四国分水嶺踏査」が、08(平成20)年11月23日に終了し、報告会が翌24日、徳島市住吉の住吉・城東コミュニティセンターで開かれた。会員と一般参加者を含め約50人が出席し、熱心に聞き入った。総合司会は中谷絹子会員が務めた。

初めに筆者が四国分水嶺踏査は06(平成18)年5月27日に徳島市の平石山からスタートし、08年11月23日に鳴門市瀬戸町明神に下って終了したことを報告。また「四国の分水嶺は、主に四国山地と讃岐山脈の二列からなっており複雑な構成をしている。当初、四国山地だけを踏査する計画だったが、分水嶺を厳密に辿ることにしたため赤石山系と讃岐山脈も取り入れることに改めた」と話した。

次に、全山を踏査する意義について、「四国の分水嶺を忠実に辿った記録はこれまでにない。四国山地の縦走登山という観点からでも剣山から石鎚山の区間縦走などは

記録があるが、数十年前のものが多く。登山道の整備状況や所要時間、三角点の埋設状態も含めて最新のデータが得られた。また、四国にも自然豊かな山が存在することを理解してもらえた。ふた夏にわたり会員に阿波踊りを体験してもらったこと、四国の物産購入を通して四国の人・物との交流ができたことは有意義だった」と指摘した。

続いて重廣恒夫支部長が、日本山岳会の創立100周年記念事業として北海道から鹿児島県までの中央分水嶺で踏査が始まり、無事終了したことを紹介。「登山の原点に返り、日本山岳会が目指しているパイオニア精神を発揮する活動として成功させた。しかし、四国分水嶺は中央分水嶺踏査に含まれていないため関西支部の創立70周年記念事業の一つに組み入れた。今回の成果は報告書として冊子にまとめた」と述べた。

四国山脈や赤石山系、讃岐山脈それぞれの分水嶺と踏査コース、山名、三角点名などの一覧表をスクリーンに写し出しての詳細な解説はプロジェクトを駆使してなされ、参加者は熱心に聞き入って

いた。さらに、日本山岳会の概要や関西支部に関係したヒマラヤ高峰の登山実績なども合わせて説明。そして「四国は関西支部のエリアに含まれているが、四国分水嶺踏査を機会にして将来的には四国支部の設立構想もある」と結んだ。

引き続き、参加した阪下幸一、滝由喜子、小林京子、久米久夫、前田正彰、佐野加代子の各会員、福島県から駆けつけた渡辺正美会員、愛媛県内でコース整備の奉仕をしてくれた古田修司会員らも苦労話などを語った。参加者からは、「四国に広大なブナの林や巨樹があることを知り感動した」「四国の山へ今後も来たい」「分水嶺踏査だ

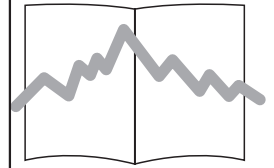


会場に展示された踏査コースの地図

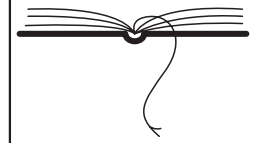
けでなく、徳島伝統の阿波踊りも経験できた」「踏査は山と山を歩いてつないでだけでなく、会員と会員をつなぐ山行でもあり、貴重な体験だった」など、印象深い言葉が相次いだ。

踏査の思い出を短歌に詠んだり、ブナの言葉を歌詞に使ったクラシック曲のラジカセによる演奏もあり、充実した報告会となった。会場には全踏査コースの地図や所要時間の分かる図表も掲示され、参加者は食い入るように見ていた。

(尾野益大)



図書紹介



秩父宮雍仁親王・著

『皇族に生まれてⅡ』 秩父宮談話集



2008年9月 渡辺出版刊
A5判 334頁
定価 4725円

本書は、「スポーツの宮様」として親しまれた秩父宮雍仁親王殿下の平成17年刊行の『皇族に生まれてⅠ—秩父宮隨筆集—』の姉妹編。スポーツや英国滞在時代の思い出をインタビューした『御殿場清話』、雍仁親王殿下と勢津子妃殿下共著の『英米生活の思い出』、研究者による『今に生きる秩父宮家の記憶』の三部構成になっている。

本会会員にとっては、松方三郎氏（本会元会長）を案内役として主に山を語る『御殿場清話』がもつとも興味を引くことだろう。殿

下の大正15年のアルプス登山は、横有恒氏をリーダーにマッターホルンやモンテ・ローザなどを氷河から氷河へ縦横無尽に登っている。

殿下の山への思い、気力、体力は一級のレベルと推察できる内容だ。親友でもある松方氏は、『雍仁親王実紀』（72年刊）にアルプス行について「これほど完全に一人の間としての待遇をうけられたのは、このアルプスの一カ月が最初で最後であったかも知れない」と記している。人間は、誰でも大自然のなかでは小さな存在でしかない。

よき山仲間と平等な立場で珠玉の時を過ごした殿下の語るアルプスには、静謐さがあふれている。「皓々と照り渡っている月光が、雪と氷とに覆われている巨山と氷河とを白銀のように煌き出しているのですが、物音とて何一つ聴こえない全くの死の世界に、耳を澄ますとただストーブの熱で溶けて

落ちる屋根の雪の雫だけだったのです……」

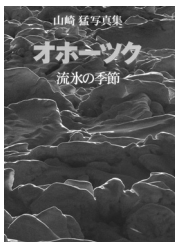
『御殿場清話』、『英米生活の思い出』はともに昭和22、23年に別々に商業出版されたものの再録である。清話のなかの一編、「肉親としての天皇陛下」は終戦の混乱期、皇族という難しい立場にありながら静かに率直に「兄」を語った殿下の誠実な人柄がしのばれる。

本書の帯には『品格』が問われる今日、ノブレス・オブリジュー（高貴なる者の責務）を体现された秩父宮・同妃殿下」とあるが、戦後60年の今、なぜ『皇族に生まれて』が編まれ刊行されたのか。英国でもスポーツでも、人々に「終始一誠意」をもって接した殿下の生き方に、社会が不透明な現代にこそ、学ぶべきものと伝わってくる。

（永田秀樹）

山崎猛・著

『山崎猛写真集 オホーツク 流水の季節』



2008年10月 里文出版刊
A4変型判 200頁
定価 8400円

北海道斜里町の「北のアルプ美術館」館長、山崎猛さんによる、3冊目の流水の写真集である。

ぜいたくな写真集であることにまず驚く。ぜいたくというのは装本のことだけではない。写真一つ一つにかけられた時間の多さもそう。指先の動くままにページをめくる。画面中央を真一文字に横切った白い筋、空と海のはさまに刻まれた光の刃の切り口である。空には雲の底面がにぶく光っているが、水面はまだ流水の眠りが深い。別のページには、のし上がってくずれ落ちる氷塊。また別のページには、雲母を一面に撒き散らしたような氷海。それらに降り注ぎ反射する陽光のさまじき色。そして、流水を迎える季節のおだやかな、また厳しい水際の姿。

こんな写真を撮るにはどれだけの時間が必要だったのだろうか。流水が最高の装束で神に挨拶する瞬間を捉えるためにおそらく数時間の待機、いやその前にここしかない秘密の撮影地点を選ぶまでの数十年間が必要だったに違いない。山崎さんがオホーツク海の流水をはじめて見てから55年、周辺の自然を撮影しはじめてから44年、斜

里に腰を据えた歳月の積み重ねがこの写真集に表われている。

写真のそれぞれへの説明はないが、文筆家の辰濃和男さんによる「流水の世界に寄り添って」という序文があり、山崎さんの思いを別の表現で伝えてくれている。たとえば、空や海を染める色の名を数え上げてみる。鬱金色、山吹色、琥珀色、珊瑚色、緋、朱、黄丹色、弁柄色……。なおも数え切れない色の数々が私たちの魂を鼓舞せずにはおかない。

流水の年ごとの変遷については、「資料 北緯44度」で19ページに及ぶ写真と図表が示される。山地での環境変化を示す指標には敏感な私たちでも、流水という指標による地球環境の変化を知ることが少ないのではないだろうか。貴重な資料である。

山崎さんの最初の写真集『流水の世界』の共著者で、40年近く流水を観察し続けている菊地慶一さんによる「ひそやかな声が耳朶を打つ」という山崎さんの人物描写が、対象を写し取る山崎さんの姿勢を示してくれる。

（杉本賢治）

John Harlin III・著

『American Alpine Journal 2008 (Vol. 50, Liss82)』



2008年
AAC Press
23cm×15cm
504頁

アメリカ山岳会（AAC）の機関誌である。

序文の1ページ全部を使ってロシア隊・K2西面の登攀に言及している。「世界のクライマーたちがK2の中で最も難しいと認めるこのルートを昨年夏、16人のロシア隊が2カ月半を費やして初登攀した。ただし、数千フィートの固定ロープ、大量の登攀道具や食糧をこのルート上に残置した。登攀は素晴らしいが登山道徳に著しく欠けており、AAJではハイライト登山として取り上げない」と姿勢を表明している。そして世界の登山界は「登山者の山への影響をより少なくし、より大きな成果を」が一つの原則になりつつあると締めくくっている。

「アメリカ山岳会2007—8」の見出しで1年間の活動内容がま

とめてある。会員数が8000人を超えたこと、コロラドに山岳博物館を開設したことなどが記されている。環境問題への取り組みとしては、15万ドルの助成金などを活用してネパール、ペルーに支援をしている。またClimatologyなる計画を通して山岳地での気候変化の影響軽減に努め、パタゴニアの山道やキャンプサイトの改良を行なっているということだ。

1929年から07年までのAAJデータベースをまとめていること、登山隊等に助成金として総計4万ドルを出したこと、クライミング・フェスタの計画なども記されている。さらに、世界の登山者との交流として、08年6月には米国と中国女子隊の交流を米国で、10月には中国で実施する。また、初の国際登山者会議をユタで行ない、20人の世界の山岳雑誌編集者を集めたサミット・ミーティングを予定するとしている。

今号のハイライト記事はブマリ・キッシュ、ジャヌー、ワイワッシュ、冬季アルプス4000以上の82峰の102日間速駆けなど14ある。困難を極めた初登攀やルート開拓についてふんだんに誌面を割

き、魅力的な写真を見るだけでも楽しい。登攀と遠征の欄では米国、カナダ、ペルー、南極、中東、アフリカ、パキスタン、インド、ネパール、中国、チベットなど18地区に分類して各山域での新ルート、初登攀の業績が324ページにわたり、詳細に記載され世界の登山界の動向が読める。

図書紹介では『The Eiger Obsession: Facing the Mountain That Killed My Father』（AAJ編集者のJohn Harlin III・著）が目をひく。1996年、フィックス・ロープが切れて父が亡くなった時、著者はまだ9歳だったという。彼は仲間から父についてたびたび聞かれるので、父の軌跡や登山暦などを調べた。そして父が墜死したアイガーに直面する。そのときの様子、心理的な動向を披露している。その他10点を紹介している。追悼、クラブ活動、索引、投稿案内と続く。

（南井英弘）



平成20年度第9回(1月度)理事会
日時 平成21年1月21日18時30分
～20時45分

場所 日本山岳会会議室

【出席者】 宮下会長・神崎副会長、

宮崎・吉永・成川各常務理事、藤井・石橋・古野・太田・堀井・相馬・山川・岡部各理事、竹中監事、近藤常任評議員、神長会報編集委員長

【委任】 鯨坂副会長、斎藤理事、深川監事

【欠席】 日下田・河野各常任評議員

【審議事項】

1・『山岳第5年、第1号』に掲載されている「宇治長次郎」の記事掲載について (宮崎)

富山県土地家屋調査士会から同会会報誌『らんどまーく』09年1月号に『山岳第5年、第1号』の宇治長次郎について記述の一部を

掲載したい旨の依頼があった。

(承認)

2・「自然保護委員会」と「高尾の森」の話し合い報告及び「高尾の森」の今後について (堀、成川)

話し合いの状況につき報告があり、今後の対応について審議した。

(報告了承、継続審議)

【報告事項】

1・予算管理報告 2008年4月1日～12月31日 (吉永)

収入全体では昨年同期に比し約5割減少、とくに入会金収入および会費収入の減収が目立つ。会費未納者に対して2月に督促をする。支出は昨年同期に比し約9割支出増であるが、これは支部に対する今年度の暫定措置に起因するものである。

2・2007.11.23上ホロカメツトク山「1周年追悼の会」「現地追悼の会」開催報告について (宮崎)

北海道支部から追悼会の報告があり、報告書が送付されてきた。

3・特例民法法人の許認可等について (宮崎)

文部科学省スポーツ課から許認可等の申請様式の変更文書(当該文書の作成は内閣府大臣官房)が送付された。3月の事業計画から本報告様式に基づいて行なうことになる。

4・文部科学省登山研修所の移管について (宮崎)

平成21年4月以降「独立行政法人日本スポーツ振興センター」に移管される旨の連絡が、文部科学省生涯スポーツ課からあった。

5・森林セラピスト・セラピーガイド資格検定試験要項の送付について (宮崎)

NPO法人森林セラピーソサエティから案内があった。

6・東海支部新年懇親会兼「ローツェ南壁登山隊」秩父宮記念山岳賞受賞記念祝賀会報告など (吉永、宮崎)

1月17日名古屋市中で開催された。秩父宮記念山岳賞審査委員長の村木潤次郎元会長に代わって吉永常務理事が出席した。

同日に熊本支部新年会が行なわ

れ、神崎副会長が出席し、首都圏の支部化の動向、山の日制定および登山界の現状についての講話をした。

7・(社) 日本山岳協会平成21年新春懇談会報告 (宮崎)

前記同様1月17日に開催され、宮下会長、宮崎常務理事が出席した。

8・冬山天気予報の実施状況 (古野)

昨年の12月19日～1月18日の間、①剣岳・立山 ②槍ヶ岳・穂高岳 ③八ヶ岳の山域で実施したが、延べ1500件を超える利用があった登録メールアドレスは約1100名。現在、アンケートを実施中であるが、満足していただけた模様である。

9・連続講演会再開 (石橋)

資料映像委員会では、創立100周年特別企画として実施した「連続講演会」の次段階を4月より開始する。

10・会報『山』1月号編集報告 (神長)

ルーム日誌 1月

6日	図書委員会 スケッチクラブ
7日	自然保護委員会 集会委員 会 山岳地理クラブ
8日	山の自然学研究会 101 の会 アルパインスキー クラブ
9日	常務理事会
13日	総務委員会 アルパイン スキークラブ 九五会
14日	会報委員会 指導委員会
15日	自然保護委員会
16日	学生部
17日	自然保護委員会 アルパ インフォトビデオクラブ
19日	集委員会 土曜懇話会 総務委員会 資料映像委員 会 アルパインスケッチクラブ
20日	00会 アルパインスキー クラブ
21日	理事会 山岳地理クラブ 三水会 つくも会
22日	海外委員会 山遊会
23日	公益法人化検討委員会
26日	インターネット小委員会
27日	アルパインフォトビデオクラブ インターネット小委員会 千葉支部

28日	海外登山基金審査委員会 麗山会 雪わり会
29日	山岳研究所運営委員会
30日	定款検討委員会
31日	土曜会 1月来室者489名

会員異動 (1月)

物故

三浦欣哉	(2956)	08・12・31
後藤圭一	(4868)	08・11・28
中野満	(5859)	08・8・19
廣瀬一隆	(6261)	08・7・7
山崎大造	(9976)	09・1・29
森啓	(13200)	08・12・27
中村至伸	(13736)	08・9・10
退会		
吉富亨	(7302)	
矢作郁子	(9497)	
岡村治明	(10123)	
池永薫爾	(12056)	関西支部
田原則之	(12897)	北海道支部
植村賢一	(12968)	
前田龍三郎	(13059)	宮崎支部
野村哲夫	(13366)	関西支部
高橋靖廣	(13741)	宮城支部
高橋喜代子	(13742)	宮城支部
大原正明	(14245)	
終身会員		
加納巖	(6727)	

図書受入報告 (2009年1月)

著者	書名	ページ・サイズ	出版元	刊行年	寄贈／購入別
金子民雄	ヤングハズバンド伝——激動の中央アジアを駆け抜けた探検家	525p／22cm	白水社	2008	出版社寄贈
近藤謙司	雪山100のリスク	215p／21cm	山と溪谷社	2009	出版社寄贈
柏澄子・中尾雄吉	山歩きはなぜ体にいいの (ヤマケイ山学選書)	190p／17cm	山と溪谷社	2009	出版社寄贈
岩崎元郎・小林修治	山で困ったときのテクニック (ヤマケイ山学選書)	237p／17cm	山と溪谷社	2009	出版社寄贈

I N F
O R M

インフォメーション

A T I
O N

◆第39回・山岳図書を語るタブ

図書委員会

写真家・小林尚礼氏に、運命の山、梅里雪山に通い続けた18年間の語っていただきます。また現在のテーマである三河併流・茶馬古道についてもふれていただきます。

演題 『梅里雪山 十七人の友を探して』その後、そして今

日時 3月25日(水)18時30分

場所 山岳会104号室

問合 三好まき子 TEL 090-8019-8601

E344mm@mbe.nifty.com

◆連続講演会 語り継ぐ日本山岳会の歴史 歴代会長「あの頃そして未来へのメッセージ」を語る

資料映像委員会

連続講演会第1回は、16代会長・山田二郎氏にご登壇いただきます。山田氏は1989年5月から93年5月までの二期4年を務められま

した。在任中は、当時、未踏の最高峰であったナムチャバルワへの日中合同登山、高地の山研建て替えなどの大きな事業を推進されました。

日時 4月4日(土)15時～17時

会場 山岳会集会室

申込・問合 奈良千佐子 FAX 03-3402-6014

Emtchisako@mbc.nifty.com

*当日は資料撮影用の機材等が入ります。ご了承下さい

*講演会終了後、場所を変えて山田氏を囲む会を予定。参加希望の方は申込の際にお申し出下さい

◆09秋田自然保護全国集会

自然保護委員会

日程 6月20日(土)～21日(日)

場所 秋田市・秋田温泉プラザ

日程 ●第1日 自然保護全国集会など

●第2日 フィールドスタ

デイ、太平山登山など

費用 2泊 約2万4000円

1泊 約1万5000円

仮申込 川越尚子 TEL 185-0011 国分

寺市本多3-7-31 TEL & FAX 042-321-6059

Ekawagoejac@mt.biglobe.ne.jp

*次号で詳細をお知らせします

◆土曜会講演会のお知らせ

土曜会

バルトロ周辺の今と昔を比べてお話しいただきます。

日時 3月26日(木)15～17時

場所 山岳会集会室

演題 「バルトロ再訪」

演者 藤本慶光会員

問合 箕岡三穂 FAX 042-776-1788

申込 不要

◆公開講演会

信濃支部

講師 中村浩志 (信州大学教授・日本鳥学会会長)

演題 「ライチョウが語りかけるもの」

日時 4月18日(土)13時30分～15時

場所 松本市中央公民館 Mウィ

ング

問合 日本山岳会信濃支部 TEL & FAX 0263-77-7069

9)

*入場無料

◆収蔵資料展「ピッケルの輝き」

市立大町山岳博物館

明治中期以降のピッケルの歴史を、故・平柳一郎氏寄託資料の展示を中心に紹介。

会期 1月17日(土)～3月8日(日)

詳細は <http://www.city.omachi.nagano.jp/sanpaku/>

nagano.jp/sanpaku/

◆企画展「安曇野残影——ナチュ

ラリストのメッセージ」

田淵行男記念館

安曇野を主なフィールドとして、多大な業績を残した田淵行男の没後20年記念企画展が開催される。

会期 2月24日(火)～7月5日(日)

詳細は田淵行男記念館 TEL 0263-72-9964

へ

『山岳』第百三年で訂正

追悼欄・川崎精雄さんのページで写真下の(1907～2007)は、正しくは(～2008)、また

松本市山と自然博物館

長野県松本市蟻ヶ崎2455番地1

TEL 0263-38-0012

URL: <http://www.matsu-haku.com/maruhaku/index.html>



山の博物館訪問



入館料 高校生以上300円、小中学生無料
*団体(20人以上) 高校生以上200円、障害を持った方及びその介助者(1名)は観覧料は免除。

開館時間 9:00~17:00(入館は16:30まで)
休館日 月曜日(祝・休日の場合は翌日)

交通 バス(松本駅よりアルプス公園線終点)
自動車(松本インターから25分)

—— 松本の自然と人のかかわりを遊びながら楽しく学ぼう! ——

松本市山と自然博物館は、平成19年5月3日に開館した自然と山岳分野を扱う松本市立博物館の附属施設で、館は松本市街地北方の松本市アルプス公園の中にある。平成19年度は約53,000人の来館があった。

当館は1階と2階に常設展示室、5階は松本平周辺の山々を360度見渡せる展望台となっている。また、国土交通省北陸地方整備局松本砂防事務所の無線中継所が複合施設で、1階には砂防学習館、6階及び7階は防災無線の中継アンテナが設置されている。

1階展示室はアルプス公園に多く訪れる親子連れを意識した展示である。展示室中央には園内の小さな池に伝わる言い伝え「デラボッチ」をイメージした高さ2.2m幅2.7mの像(写真参照)と、松本年中行事双六があり、遊びながら松本の四季の身近な自然と人との関わりを学べるようになっている。また、室内は水辺、山岳、山、里の4つのコーナーに分けて、そこに生きる動植物達の標本や剥製を展示している。

2階展示室は展示更新がしやすいように設計されており、昆虫標本箱108箱のチョウや甲虫を中心とした昆虫標本や植物標本を展示している。また、登山関係の展示は前身のアルプス山岳館の資料を引き継ぎ、近代の登山史を中心に展示をしている。現在の常設展示数は857点である。

学習支援活動は開館以来、アルプス公園をフィールドとした自然観察会、写真教室等の講座、目で見ると北アルプス登山史展、どくとるマンボウ昆虫展、ボタニカルアート(植物細密画)展等の企画展を実施してきた。また、常設展示は昆虫・植物標本を中心に随時更新している。

連続講演会 語り継ぐ日本山岳会の歴史 歴代会長「あの頃 そして未来へのメッセージ」を語る

2005年10月15日、日本山岳会は創立100周年記念式典を終えました。100年の歴史のなかで、その時代のニーズと対峙しつつ、会の頂点で会員を統率してこられた会長にスポットを当てた連続講演会「語り継ぐ日本山岳会の歴史 歴代会長「あの頃そして未来へのメッセージ」を語る」——を企画しました。会の歴史を語り継ぐ資料として歴代会長に順にご登場いただき、その音声と映像を作成、DVD化を行ない、保存することが目的です。

詳細は『山』のインフォメーション欄でお知らせします。第1回は第16代会長・山田二郎氏にご登場いただきます(詳細は18頁参照)。ご期待ください。

資料映像委員会

本文中、逝去された8月18日は8月14日、著書の『山を見る目』は『山を見る目』、『静かな山』は『静かなる山』の誤りでした。会員の横山厚夫さんからご指摘がありました。

(山岳編集委員会)

◆編集後記◆

● 昨年の秩父宮記念山岳賞は、「大日岳巨大雪庇の形成機構に関する研究」と「ローツェ南壁初登攀」に決まりました。今月はその巨大雪庇について、受賞された3名の方に分担執筆していただきました。紙数の少ないなか、想像を絶するその構造を綴っていただきました。来月は「ローツェ南壁」を予定しています。

● 昨年12月から1月にかけて、北アルプスやハケ岳で冬山天気情報を試験的に配信しました。登山中も携帯メールで天気予報を受けられるという画期的な試みでした。その成果を報告してもらいました。

(神長幹雄)

日本山岳会会報 山 765号

2009年(平成21年)2月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビューハイツ四番町

TEL 東京(03)3261-4433

FAX 東京(03)3261-4441

発行者 日本山岳会会長 宮下秀樹

編集人 神長幹雄

Eメール jac-kaiho@jac.or.jp

印刷 株式会社 双陽社